シナリオ短編集～未来通信の午後

hibachi110

未来通信の午後

未来通信の午後①

社長室。社長の前に二人の男が呼び出されている。「これからの我が社は君達のような若者が引っ張っていくんだ」「石丸くん、君は木沢くんを助け２人で力を合わせて我が社を盛り上げていってほしい」自信満々といった表情の木沢と対称的石丸、顔は平静でいるが拳を握って怒りを堪えている。回想）会議室、長井課長と石丸。「私は石丸君を押したんだが…最後は社長の一声で木沢君に決まって終った」「なにせ木沢くんは社長が可愛がっていた孫娘に気にいられ入り婿に成ったからな…まあ、君も気を落とさず頑張ってくれ！」

未来通信の午後②

スナック。水割りを浴びるほど飲む石丸。「くそう！木沢のやつ、全ての面で俺のほうが勝れていると言うのに」誰もいない深夜の道を歩く石丸。ガード下、石丸を呼び止める女の声がする。道端に占いの台を出していた女。台の上には大きな時計が置いてあった。「な、なんだ占いか！」無視してその場を立ち去ろうとする石丸。「いいえ、占いでは有りません…私は時のメッセンジャー、ルネ」「あなたの願いを一つだけかなえてあげますよ！」石丸、ルネの方を向く。「願いをかなえる？」

未来通信の午後③

「あなたは今、同期入社の木沢さんが先に営業課長に成ったことを妬んでいますね」「このままでは…出世争いは木沢さんが常にあなたの上に出てしまうでしょう」「な、何でそんなことを…？」「私は過去と未来の私と交信することが出来ます」「過去をほんの少し変えるだけであなたが課長に、木沢さんは南米支社に左遷されることでしょう」「そ、そんなことが出来るのか？」

未来通信の午後④

石丸は思わず座席に腰掛けルネの話に耳を傾ける。「ええ、過去の私に頼んで時の流れをちょっとだけ変えてもらうのです」ガタンゴトン、電車がガードの上を通過する。「そうか、１００万円有ればいいんだな！…何とか手にいれるだから頼む！」「わかりました、お金のほうはあなたが課長に成った時で結構です」ルネはそう言うと大きな時計に両手を乗せて祈り始めた。その時、時計は微かに光を帯び急速に逆行し初めた。

未来通信の午後⑤

朝、晋東商事、営業２課のドアのノブに手を掛ける石丸。一人のＯＬが泣きながらドアを開け部屋の外に駆けていく。石丸何気なく２課の女の子に訪ねる。「白河くんどうしたんだい？」うなだれ下ろした拳を握り緊めている木沢。「彼女の不倫の相手の木沢課長がサセンされるんだって

」ニヤリと笑う石丸。

未来通信の午後⑥

社長室から出てきた石丸。「有難うございました！失礼します！」自信満々で社内を歩く石丸。「石丸さん…課長昇進、おめでとうございます」と方々から激励の言葉
スナック、カウンターに石丸と白河メグミ。終始うつむいているメグミ。慰めるメグミの肩に手を掛ける石丸。「もう木沢の事は忘れろよ…」石丸、ポケットから婚約指輪のケースを取り出しメグミの前に差し出した。「婚約指輪、君に受け取ってほしい」ケースを開けるメグミ、石丸に返そうとする。「前にお断りしたはずです」「木沢の南米支社行きは短くて１０年だそうじゃないか」石丸立ち上がる「返事は今直ぐじゃ無くて良い…それは君に預けておくよ」

未来通信の午後⑦

ルネが居る。１００万円の封筒を手渡す石丸。「ありがとう…君の御陰で課長になれたよ！」封筒の中味を確かめるルネ。「それは、おめでとう御座います」「これで、晋東商事での俺の地位も補償されたようなものさ」ルネが心配そうに「でも、一つだけ忠告します…過去を少し変えたことで未来は微妙に変わっていきますよ」

未来通信の午後⑧

晋東商事ビル、会議室にて部長と石丸。「石丸くん、今日の接待は、君にも同行してもらうよ…大事な取引先の方だ。君にもぜひ会わせておきたい人物だ」「ぜひ会わせたい？…わかりました」料亭、月蔭に部長と石丸の待つ座敷に一人の男が通される。部長が石丸に紹介する。「こちら大東興行の西川さんだ」頭を下げる石丸「よろしくお願いします」「こんど営業２課の課長になった石丸です」「おお、若いな！…大したもんだ」「どうも」部長は持ってきた菓子折りを男に渡した。「いつもすまんな」料亭の日本庭園。月に雲がかかる。西川を見送る石丸と部長、発車するタクシー。「部長っ…あれは賄賂じゃないですか！」「声が大きい…この世界で生き延びるためだ、仕方無いことだよ」

未来通信の午後⑨

喫茶店内に迎え合わせで座るメグミ。石丸が遅れてやってきた。「どうした！こんなとこに呼び出したりして」メグミ、深刻な顔で話す。「これ、お返しします」机の上におかれた婚約指輪のケース「メ、メグミ…」「石丸さん、私色々考えたの…でもやっぱり木沢さんの事が忘れられなくて」「ごめんなさい、私、木沢さんについていくことにしたわ！」「な、なんだって？」「木沢さんね、奥さんと別れて！私に一緒に来てくれって言ってくれたのよ」そそくさと席を立つメグミ。「それじゃ、石丸さん、さよなら！」一人残され茫然とする石丸。

未来通信の午後⑩

営業２課にうつむきかげんで戻ってきた石丸。「あっ課長！社長がお呼びに成っていますよ」社

長室、石丸が入ってくる。社長は電話をかけていた。「お、そうか…わかった」「社長…お呼びでしょうか？」「おお、石丸君か！」「今の電話、長井部長の家からだ」「長井部長？」「長井君は自殺したそうだ」「えっ自殺！」

未来通信の午後⑪

「実は困ったことが起きてねぇ…これを見た舞え」社長、写真週刊誌を石丸に差し出す。記事の見出し「料亭月影の密会」タクシーを見送る長井と石丸の写真。顔色を変える石丸。「どうやら警察も動き出した…君と長井部長の二人でやったことするんだ！」社長の机の引き出しからピストルを取り出し石丸に渡す。「これで長井部長の後を追え」「あとのことは心配いらんぞ…我が社を救うにはそれしかないんだ」

未来通信の午後⑫

酔っ払ってガード下にやってきた石丸。ルネが同じ位置で座っていた。「どうですか？課長になった感想は…」「ふん、どうせわかっていたんだろう俺がこうなることを？」ルネ微笑みを見せて「石丸さん、木沢さんもあなたが来る前の日に私の所に来ていたの」「なんだって！」「彼の願いは、今の奥さんと別れて、何もしがらみのない外国で恋人と暮らしたいって」「そうか、やつも願いがかなった訳か…ハハハハ」「俺は何のために課長にこだわっていたのか…こう成ったら地位も名誉も、さよならだ！知ってることをあらいざらいぶちまけてやるぞ！」

未来通信の午後⑬

ルネが険悪な表情で視線を送る。路地の影に隠れていた２人の男に気付く。「石丸さん！あの人達は晋東の社長の命令であなたを殺しに来たようです」「ふん、口封じか！」「ルネさん、俺、生き残れるかな？」無言で微笑むルネ。「まあ、いいか…どっちでも」石丸突然走り出す、追う殺し屋の二人。

未来通信の午後⑭

新聞の大見出。晋東商事の不正発覚の記事。中央に警察に連行される石丸重ねて、（回想…宇宙空間）ルネ「人は未来に向けて目標を持ちそれを達成しようと努力する。でも…目標を達成出来たことが果たして自分にとって幸せなのか誰もわからない」

ＥＮＤ

サイボーグケイ

“２０××年、医学や工学の進歩が高精度の人工臓器や人工人体を作り出し、人間たちの平均寿命を飛躍的に伸ばした。一方、人工人体はスポーツ界や戦争へも応用され選手や兵士たちの強化パーツとして、普及していった。”
①■湾岸道路を赤いスポーツカーが過ぎ去る。運転する若い女。
ガイドモニターに警戒音。そして、無線が飛び込む。
「本部より司令・・第７行政区近くにて強化人間と見られる男の暴行事件発生。至急、急行されたし」「こちら、特務警察のケイ…了解」

“その結果、強化人間達の犯罪も飛躍的に伸び、彼らの能力に対抗する為、強化人間で組織した特務警察が生まれた。”

②■中央行政区の国会玄関付近。黒い車が玄関に横付けされた。取り囲む多くの報道陣。
秘書が車のドアを開ける。ある男が車を降りる。報道陣がごった返しマイクを向ける。
「ジマー議長、一言願います！」「今国会での強化人間人権基本法の成立は？」「度重なる強化人間たちの暴動に対する御意見を！」
ジマーは、一言も告げづに建屋に入っていった。

③■繁華街の路上で、大勢の人々が血を流して倒れている。
大男を２人の警官が押さえつけようとしている。男は警官を降り払う。警官の一人は、地面に叩きつけられ、もう一人は消火栓に激突しぐったりとなる。
地面に叩きつけられた警官、ピストルを抜き、男目掛けて一発撃ち込む。銃弾は男の胸に直撃したがめり込んだ銃弾は貫通しない。
警官は、無我夢中で２発、３発と撃ち込むが、、、「ば、馬鹿な、強化人間か…」大男は発砲した警官を担ぎあげ地面に叩きつける。ぐふっ。。。動かなくなる警官。
腰がぬけ、逃げ遅れた女ににたっと笑い近づく男。「や、止めてこないで」
男の足元に一発の銃弾。「だれだお前は・・女・・死にたいのか」「特務警察のケイ・・・」男はケイに突進する。降りおろすパンチ。
軽く除けケイのパンチが腹に入る。あっけなく前屈みに崩れる男「馬鹿な・・女に・・」

④■警察署の廊下。刑事とケイの会話
　ケイ「被害は」
　刑事「警官２人を含めて５人が死亡、１２人が重軽傷」
　　「やつは、レスラー崩れの外山ガイ。３年前に、大事故に遭い
　　強化人間となり一命を取り留めたそうです。」
　　「目撃者の証言では外山は急に暴れだし見境なく通行人達に
　　殴りかかったそうです」
　もう一人の刑事がケイの元に駆け寄る
　刑事２「ケイさん・・外山のカルテが手に入りました」
　　「それによると、例の人工頭脳が埋めこまれているそうです」

「やはりそう、マクダネル社製の人工頭脳の暴走」
⑤□横顔のシルエットに人工頭脳はめ込み
刑事２「暴走を起こした人工頭脳は１９９８年製のもの。
最近頻発する暴走事件の犯人のほとんどがその時のマクダネル社製です」
□マクダネル社のイメージにシルエットで幹部達の姿重ねる
□ーー字幕
マクダネル社製の人工頭脳は低価格の為スラムを中心とした低所得層に広まっていた
ケイ「マクダネル社は３年前欠陥が発覚して、倒産その幹部たちも姿を消したはずね」
刑事「はい。当時の専務や開発担当者はその後逮捕されたが、
肝心の社長が行方不明のままとか」

⑥□新聞記事
強化人間狩り敢行
政府はマクダネル社製の人工頭脳を持つ強化人間達の取り締まりを強化すると発表
⑦□スラム、武装した警官達が少年を追う
爪付き倒れる少年　再び起き上がるが行き止まりに突き当たる
武装警官が銃を構え少年に歩み寄る
少年「畜生・・」
引き金を引く直前　銃が吹き飛ぶ
ケイ「そこまで、相手は無抵抗よ」
「ケイ・・」
□スラムの広場
大勢の人々後ろ手に並べられている
中には大けがをしている人々も
少年「と、父さん・・」「シンヤ」
少年と父が抱き合う
ケイとすれ違う男
□ーー字幕
特務警察別働隊隊長ソガ
□連行される女子供
父と引き離される子供
ケイ「なんてひどいことを・・」
ソガ「ケイ、甘いな・・強化人間は危険な存在だぜ」
「お前もあまりことを興すなよ・・俺はお前を殺したくないんでな
・・・はははは」
⑧□国会の記者会見の席上
ジマー「政府の取り締まりはやりすぎです。これは、政府の明らかな強化人間に
対する迫害です・・私は議員生命をかけて抗議します」
□強化人間たちの収容所
テレビ越しに見ていた人々
ケイが入場、シンヤがケイを見つけた　「お姉ちゃん」
「シンヤ君・・お父さんと君の結果は陰性よ、まもなく処置をして釈放してあげる」

「ホント・・」
父「あの男・・」テレビに映るジマーに男は震えていた。
「ま、間違いないあの男だ・・顔は変っているがあの男の声」
ケイが訪ねる
「松木さん、顔色が・・具合でも」
「ケイさん・・べ、べつに」
⑨□ーー字幕
特務警察本部
□オペレーティングルームで沢山の職員達が働く
ケイとジャンヤ、通路で話している
ジュンヤ「例の議員を調べてとんでもない事実がわかったぜ」
コンピュータ端末に向かう二人
ジュンヤ「決め手は声だ・・」
「やつは顔は変えたが声までは変えてなかった・・
ジマーは行方不明のマクダネル社の社長だ」
「粗悪の人工頭脳で悪どく儲けてから顔を整形し、
偽名を使って行方をくらました」
ケイ「強化人間たちを食い物にした男が、今は強化人間の
人権保護運動の指導者ってこと？」
「ついでに松木親子のことも調べておいた」
「松木タカフミ４０才・・家族は３年前の旅行で大事故に合い、
３人とも脳死状態。
マクダネルの人工頭脳を使って一命を取り留めたらしい」
「しかし、１年前妻のナオミの症状が悪化・・・人工頭脳の暴走が原因らしい」
ケイ「それでジマーの声を聞いて顔色が変わったのね」
⑩□車中
運転席にジュンヤ、助手席にケイ
ケイ「政府は私も捕まえるつもりかしら」
ジュンヤ「馬鹿いうなよ。君のはマクダネルの欠陥品じゃないんだぜ
・・・心配するなよ」
車が止まる
ケイ「でも、いまに私あなたを殺してしまうかも」
ジュンヤ、ケイを抱きよせ
「君が俺を殺したら、俺も強化人間の手術を受けられる
そうしたら君も俺のプロポーズを受ける気になるかもな」
涙ぐむケイ「ジュンヤ・・・」

⑪□トレーニングルーム
バーチャルリアリティで汗を流すケイ
□浴室
シャワーを浴びるケイ、右腕の強化パーツが光る
□寝室

ベットにガウンのまま倒れこむ
右腕を掲げながら涙のしずくがこぼれる
⑫□目を閉じイメージの映像
幼いころ、父と大草原で鬼ごっこ

⑬□ジマー議員の豪邸
男が猟銃を持ってうろつく
⑭□寝室
浅い眠りのケイ、非常招集のベルに目を覚ます
□車中　無線が流れ
「収容所から松木が脱走した」「そ、そう・・目的はジマー議員ね」
「すでにジマーは松木の手中にあると見られる」
⑮□深夜の湾岸道路走るケイの車
「犯人の車は１３ベイエリアのスラムに向かっている・・追跡せよ」

⑯□スラムの一画
廃墟マンション
現場に急行したケイ
一台のパトカーと二人の警察官が出迎える
「犯人は・・」
「この廃墟の７かいです」
□少年がケイにすがりつく
「お姉ちゃん・・父さんを殺さないで」
「シンヤ君・・安心してお父さんを助けるだけ」
「ホント・・」「ええ・・だからここで待ってて」
⑰□とある薄暗い一室
窓を見つめる女が座っている
猟銃を構えた松木とひざまずくジマーがいる
無表情の女
松木「き、貴様のために妻はこうなった・・」
ジマー「す、すまん許してくれ・・・金ならやる、いくら欲しいんだ」
松木、ジマーの髪を鷲づかみに引きづり部屋の外へ
□ケイ、銃を構え階段を登る
⑱□松木、猟銃をジマーの頭に付ける
ケイの声で「松木・・特務警察のケイよ・・銃を捨てなさい」
松木、ケイに一発発砲　避けるケイ
ジマー隙を見て逃げ出す「うわあああ」
松木、逃げるジマーに向け弾丸を発射
一発がジマーの肩口に命中
ケイ、松木に威嚇射撃しつつ、うずくまっているジマーを引き寄せる
ケイ「ここに・・じっとしていて」
ジマー「わ、わかった・・」

ケイ、銃を構え暗闇の廊下を進む
□廃墟の外では別働隊が到着
装甲車を降りるソガ
□闇の廃墟の中
ケイをねらう銃弾
かわしながら応戦するケイ
袋小路に追い詰めたケイ「動くな」
不意に黒い陰のシンヤ、後ろからケイを邪魔する「うたないで・・」
ケイ「シンヤ君」子供に気をとられ油断
右腕を撃たれる
ケイ姿勢を低くし「松木、撃たないで・・シンヤ君もここに居るのよ」
シンヤ「お父さんを殺さないで」と立ちふさがる
ひるむケイ
子供が父に駆け寄る
松木「シ、シンヤ」　銃弾を落とす
ケイ、ほっと一息　「・・・」
外からの集中砲火が親子を貫く
ケイ、唖然とする
⑲□廃墟の外
別働隊の銃撃部隊が銃を発射した直後

⑳□廃墟マンション
横付けされた別働隊の護送車が数台
救急車で運ばれる重傷のジマー
ケイ、血まみれの右腕を押さえ、出てくる
ソガ、出迎え「ケイ・・危なかったな」
ケイ、ソガの頬を張る

ＥＮＤ

鬼面の聖女クズネ

鬼面の聖女クズネ①

廃墟の街並み。魔族と人類の全面戦争が終結し３年後の地球。少女がひとり、瓦礫の中に小さな草花を見つけ摘みとる。 娘「母さん、こんな所に花が．．．」娘は花を掲げ、遠くにいる母に見せる。「べ、ベネット」と母親の顔色が青ざめる。ベネットの背後に忍び寄る黒い影。ベネット、母の異変に後ろを振り返り悲鳴をあげる。

鬼面の聖女クズネ②

全長１０メートルも有りそうな巨大な蛇が鎌首あげて襲いかからんと狙っていた。腰砕けの状態でその場に座り込み動けないベネット。襲いかかる大蛇。顔を伏せる母。瞬間、３発の銃声と共に現れた二人の人影。そのひとりの青年はベネットを抱きかかえ物陰に、もうひとりは女。大蛇の前に立ちふさがり剣を振りかざす。

鬼面の聖女クズネ③

頭巾を被った女。大蛇の尻尾の攻撃で切り裂かれた頭巾、そして右腕に切り傷。女の素顔がのぞく。女の顔は面長で美形しかし、頭に２本の角。一刀両断で大蛇の首をはねる。青年「俺はテツオ。怪我はないかい。」ベネット「うん、ありがとう。私はベネット。でもあのお姉ちゃんすごい！」微笑む女、落ちた頭巾を拾い再び被る。娘に駆け寄る母。母「あ、ありがとうございます」ベネットを抱き寄せる母親。ベネット「母さんみて、こんな所にお花がさいてたわ」

鬼面の聖女クズネ④

地下鉄の連絡通路入り口。２人の短銃を構えた男が警備する。ベネット親子とテツオたちが入ろうとする。止める警備。ベネット「この人達は私を助けてくれたの」地下街。
発電が安定せず照明が明るい、暗いを繰り返す中、数十人の人々が疲れきった表情で生きている。一人の男が近づいて来た。

鬼面の聖女クズネ⑤

男「ベネットを救ってくれたそうだな、名前は」テツオ「テツオ、と彼女はクヅネ」男「お、女か、何故頭巾を取らない」テツオ「すまないが顔に大火傷をしている彼女も女。誰にも見られたくないはず」男「そうか、すまなかった。俺はこの地下シェルターのリーダーライル」「何もないがゆっくりして行ってくれ。」ライル、テツオと握手。

鬼面の聖女クズネ⑥

缶スープをすするテツオとクヅネ。ベネット、クヅネの隣に座り「お姉ちゃんの角見たよ。お姉ちゃん魔族でしょう。」とっさに頭巾を押さえるクヅネ。母「シェルターのリーダーライルはとくに魔族には恨みを持っているわ」テツオ「クヅネそれを飲んだら、ここをたとう」

鬼面の聖女クズネ⑦

中央の広場。あたりがざわついて一人の男がもがき苦しむ。観衆「おい、どうした」男の身体を突き破り、５０センチ程の蜘蛛が２匹飛び出す。観衆「銃だ銃をもってこい、魔族が侵入した。」銃声に気付くクヅネとテツオ。クヅネ剣に手を添え立ち上がる。広場。１匹の蜘蛛は無残に死んでいた。もう一匹は天井に飛び移り素早く逃げる。「上だ、逃がすな」飛び交う銃声。

鬼面の聖女クズネ⑧

奥のフロアーにいたライル現れる。「魔族が出たのか」「はい、気を付けて下さいそっちに行きました」「ライルさん上です」「何」蜘蛛はライル目掛けて飛び付いた。「く、は、放せ」もがくライル「う、銃が使えん」クヅネの剣がスパッと蜘蛛を捕らえ、次の瞬間まっ２つになりポトリと落ちる。ライル「お、おまえは」

鬼面の聖女クズネ⑨

クヅネの頭巾はとれ角を生やした素顔がのぞく。ライル「おまえも魔族か！」銃を持った男達がクヅネを取り囲む。割ってはいるテツオ。ベネット「まって、待って下さいクヅネ姉ちゃんは悪くない」一同ベネットを注目。「お姉ちゃんは優しい人。だから撃たないでお願い」

鬼面の聖女クズネ⑩

地上。ベネットとクヅネたち。母「ほんとにごめんなさい。命の恩人になんてひどい」テツオ「いいえ、暖かいスープを下さってありがとうございます」ベネット「お姉ちゃん、さよなら」クヅネ微笑み手を振る。そして、歩き始める。

鬼面の聖女クズネ⑪

夜、廃ビルの影が焚き火の炎で照らされる。苦しむクヅネ。クヅネの腕に青い刺し傷。テツオ「クヅネ、しっかりしろ」そのとき人影を感じるテツオ。銃を中段に構える。人影が近づく、銃口を影に向ける。テツオ「ベネットかい」ベネット、リックに沢山の食糧を詰め込んでいた。「お姉ちゃん、どうしたの大丈夫」「蛇の毒が回ったらしい」「大変、そういえば母さんが薬箱を入れてくれたはずよ」リックの中身をかき出す。

鬼面の聖女クズネ⑫

荒野。闇夜に巨大な鳥が羽ばたく。鳥は急降下し獲物の蛇を捕らえる。飛び立つ。廃ビル。ぐっすり眠っているクヅネ。焚き火を囲みベネットとテツオ。ベネット「テツオ兄ちゃんはクヅネ姉ちゃんのこと好きなの」テツオ「ああ、好きさ。クヅネは角が有るだけで普通の人間と変らない」「いやそれ以上の心を持ってる。」

鬼面の聖女クズネ⑬

照れながら話すテツオ。「それに、美人だしな。こんないいおんなはそうはいないさ」「ベネット、母さんも心配してるだろう」「夜は危険だからここに泊まって、明日の朝送って行くよ」「うん」

鬼面の聖女クズネ⑭

朝、シェルターの前。クヅネとテツオがベネットを見送る。クヅネ「あ、り、が、・・とぅ」ベネット「お姉ちゃん、元気になってよかったね」その場を立ち去ろうとした２人。大勢の悲鳴がシェルター内から聞こえる。テツオ「クヅネ、行くぞ」シェルターに向かって走る。シェルター内部は死体が散乱。息も絶え絶えの男「ら、ライルは魔族だった。」テツオ「なに」男「やつが魔族を引き込んだ」まもなく絶命

鬼面の聖女クズネ⑮

奥のフロアーで悲鳴。かけて来たベネット「母さん母さん」テツオベネットを受け止める「ま待て」奥のボイラー室。ベネットの母の他、十数人の女子供中心に３人の銃を構えた男。ボイラー室の扉は破壊され魔物が飛び込む。部屋の隅に集まる人々。魔物は植物と狼が同居したようなおぞましい姿。破れているがライルの服を着ている。銃を打ち込む男達、微動だにしない魔族少しづ詰め寄る。

鬼面の聖女クズネ⑯

テツオ達の耳に銃声が飛び込む。テツオ「あの奥だ急げ」ボイラー室。２人の男が触手に突き刺され絶命。もう一人の男が必死に銃を打ち込む。しかし、触手の餌食に。残る女子供に危機迫る。触手がベネットの母に向けられた瞬間触手がポトリと落ちる。魔族は、背後の人影に後ろを振り向いた。

鬼面の聖女クズネ⑰

クヅネが登場。 銃を構えたテツオ。クヅネは剣を身構えあっと言う間に魔族の３本の触手を切り

落とす。魔族「おまえは俺と同族のはず、何故俺に刃を向ける」クヅネ「わ、た、し．．．ま、ぞくちがう」そこへベネットが飛び込む「母さん」母「来ないで」すきをついて魔族が飛び掛かる。魔族はベネットを捕獲。魔族「武器をよこせ、さもなくばこの娘を殺す」

鬼面の聖女クズネ⑱

クヅネとテツオふと顔を見合わせる。そしてクヅネが剣を投げ出し地面に付き刺さる。テツオが銃を投げ出す。魔族の触手が剣つかんだ瞬間クヅネが剣に気を送り。電気が走ったようにひるむ魔族。すかさずクヅネが走り出し剣を奪い取り、次の瞬間魔族の首が切り落とされる。

鬼面の聖女クズネ⑲

シェルター外。ベネット母子とクヅネたち。ベネット「もうお別れなの」テツオ「ああ、でもまたいつか会えるさ」「それまで元気でね」クヅネとテツオは、旅を続ける。魔族も人間も共に暮らせる安住の地を求め…。

ＥＮＤ

俺の相棒

俺の相棒①

改札口前にトランクを持つ女。女は腕時計を心配そうに見いる。駅の売店の横や柱の影に数人の男達が女を監視。男達の中に新聞を広げ女を横目で見ながら人込みにふと目をやる修一。その時、人の流れに逆行して歩く少女に目がいく。「ミカの奴、またお節介か！」その時、女の元に猛然と突進しトランクを奪う若い男。「現れたぞ！…捕まえろ！」「待てっ！」「ヨシオを、ヨシオをかえして下さい」と泣き叫ぶ女。

俺の相棒②

方々に散っていた刑事たちが一斉にトランクを抱え走る男を追う。７番線ホームに電車が入り、扉が開く。男がホームに駆け込んできた。追う刑事達。男は取り押さえられる寸前に、まさに閉まろうとする電車の扉にトランクを投げ込む。「しまった！」電車が走り出す、男は取り押さえられた。「隣の駅に警官を配備しろ！」「はいっ」電車の戸口で手を振る先程の少女Ｍ。「ミカ…頼むぞ」

俺の相棒③

電車の中に投げ込まれたトランクに近付く男。電車が陸橋に差し掛かると窓からトランクを放り投げる男。電車が陸橋を通り過ぎる。河川敷に転がったトランク。近くに止めてあった黒い車から出てきた男。トランクを持つ瞬間を橋下駄の影から見ていたミカ。老朽化で人影無い団地。黒い車が止めてある。

俺の相棒④

山ノ内警察署、捜査一課内。中央のデスクに座る課長を囲んで５人の刑事が集まっている。「結局…トランクは見付からなかったか！」「あの二人は、見知らぬ若い男に金で雇われただけのようです」「電車の乗客の証言でトランクは双葉川の河川敷に投げ落としたと…」「それで、河川敷のほうには何か手掛かりは？」「今の所、トランクが投げ込まれた前後１時間不信な黒い乗用車が、目撃されていますが…足取りは未だ…」「人質が無事であって欲しいが…」「もう一度その黒い車の足取りをあらってくれ」「はいっ」

俺の相棒⑤

退席する修一に「おい、修一…どこへ行く？」「はあ、ちょっとトイレへ」人影無い神社の境内に一人立つ修一。「修一…待った？」修一の前に立つ狛犬にちょこんと腰掛けて現れたミカ。「ミカ！…ヨシオくんは無事か？」「ヨシオくんは今のとこ、無事よ！でも金も受け取ったし早くしないと」「そうか、それで場所は？」狛犬から飛び下り、修一の前に進み出るミカ。ミカは目をつぶり、唇を尖らせ修一にＫＩＳＳを求めるように顔を近付ける。「修一…ご褒美！」修一、

顔を紅潮させ。「馬鹿！こんな所で誰かに見られたら！」「フフフ…見られたって良いじゃない…だって私の姿が分かるの修一だけだもの」「しかし…」「嫌なら、教えてあげないもん！」

俺の相棒⑥

修一と半透明なミカのＫＩＳＳ。〜俺、仁野修一はこの春念願の刑事に成った。しかし、俺には誰にも話せない秘密があった。ここにいる女は何を隠そうユウレイなのである。彼女には３ケ月前の出会いを切っ掛けに付き纏われ、そして俺の仕事に何かとお節介するようになった。

俺の相棒⑦

ある工事現場。３ケ月前。年老いた男の写真を見せる若い娘ミカ。「あんた山下さんの娘さん？」「はいっ…山下美加です」「山下さんは、半年前にここを辞めて…その後の消息は分からんよ」「誰にも言わずに辞めていったからね」「あ、そうそう…よく通ってた飲屋の女将なら分かるかも」居酒屋千吉。「ああ、一郎さんの娘さん？」「お役に立てないで御免ね…一郎さんあれから急に来なくなったもの」「私はてっきり田舎へ帰ったと…」町中を歩き回るミカ。途方に暮れて立ち尽くすミカ急に御腹を抱えて苦しみ倒れる。その時近くを通り掛かった自転車の警察官、修一「どうしました？」「御腹が…急に…ウグッ」

俺の相棒⑧

総合病院。手術中電灯、外で待つ警官。電灯が消え扉を開け医者が出てきた。「今夜が峠です…身内の方を呼んで戴きたいのですが」「それが…彼女の手帳をもとに彼女の肉親の調べたのですが、１ケ月前に母親を無くし蒸発中の父親を捜して今回、上京したようです」「それで肉親はその父親一人です」病室に入ってきた修一。虚ろな目のミカ「ミカちゃん、しっかりして…」「あ、あなた…さっきのお巡りさん？」「ああ、そうだよ！…修一って言うんだ。「シュウイチさん…わ、私…死ぬのね！」「あきらめちゃいけない…生きるんだよ」「シュウイチさん…私の最期のお願い聞いてくれる」「と、父さんを…と、うさ…」力尽きたミカ。

俺の相棒⑨

「せ、先生！」慌ただしく出入りする医師たち。眠るように穏やかな顔のミカの手を握り語り掛ける修一。「ミカちゃん、きっと君のお父さんを捜して上げるよ！約束する」俺はその時以来、山下ミカの霊に取り付かれてしまった。アパートに帰った修一。そこにはミカの姿があった。「き、君はどうして！」修一、驚きで腰砕けのようにその場にへたりこむ。「お巡りさん…私、父を見つけるまで成仏出来ないみたい」「じょ、成仏できないからってどうして俺のとこに？」「修一さん…さっきの約束…本当ですよね」「あ、ああ…ほんとうだから、早く消えてくれ！」

俺の相棒⑩

修一の恐怖の表情に薄笑みを浮かべるミカ。「お巡りさん…私が怖いのね？」「いいわ…フフフ

…今日のところは消えてあげる…」「でも、父が見付からなかったら…その時は！」ミカ、おどけて修一に襲い掛かろうと「うわあ！やめてくれっ！」襲い掛かると同時にパッと消えてしまうミカ。「うそよ、修一さん…優しくしてくれて有難う」「父は私が捜します…あなたとはこれでさよならよ」

俺の相棒⑪

移動する車に修一、助手席にミカ。「結局、君の父さんは無事働いてることが分かって…成仏出来たんはず…じゃ何で君は今ここに残ってるんだ」「だって、修一さんのこと…好きに成ったんだもの」「好きにって！…ユウレイに好きになられても…」「それに修一さんって危なっかしくて…私が付いていてあげないと…」「冗談じゃ無いぜ…」「しっ…！ここよ」荒れ果てた古い団地、近くにれいの黒い乗用車。

俺の相棒⑫

車から降りて走り出す修一。中空にふわふわと浮かび修一を案内するミカ。「こっちよ！ここの３階よ…早く！」とある部屋に縛られたヨシオと真壁がいた。「ハハハ…ヨシオ、御前ともお別れで先生は悲しいぞ」「御前の両親にとっちゃ、１億円なんかはした金だろうがね！」猿轡をされモゴモゴともがくヨシオ。真壁の手にナイフが光る、ナイフの平らな所をヨシオのホッペにピタピタ当て「これは御前が悪いんだぞ…大した頭も良くないくせに…金の力で城東中へ行こうなんて」

俺の相棒⑬

その時、銃を構え部屋に侵入してきた修一。「警察の者だ！…ナイフを捨てろ！」室内に踏み込むと縛られたヨシオにナイフを突き付けて威す真壁。「どけっ！…この子が死んでもいいのか！」怯えきったヨシオの顔「真壁、ナイフを捨てろ！…もう逃げきれんぞ」その時、突然真壁のナイフを持つ手が捩られる。ナイフをおとした瞬間、逃げ出すヨシオ。真壁に殴り掛かる修一。

俺の相棒⑭

ミカが真壁の腕を掴んで現れる。真壁、後手にされ手錠を掛けられる。数台のパトカーが急行する。次々と踏み込む刑事達。初老の男が修一に近付く「修一…よくやった」「課長！」「犯人が被害者の通う学習塾の先生とは！」「しかし、修一どうして犯人が分かったんだ？」「ある通報を受けまして…」「また通報か？」窓べに腰掛け修一にウインクするミカ窓から外に浮き上がりパッと消える。

俺の相棒⑮

修一のアパートの戸口。ポストに小包が入っているのを見つける。室内で小包を開ける修一、中には手紙と見合い写真？「お袋め！また見合い写真かよ！」ピラッとめくってみる修一。「へえ…なかなか綺麗な人じゃないの！」修一の背後に現れたミカ。「うわっ…ミカ！…急に出てく

るな！」「見合いするの？」修一、ミカの顔を盗み見るように「そうだなあ…」無言のミカ。「ミカが安心出来る刑事に成るまで…止めとく！」

ＥＮＤ

魔空戦士

魔空戦士①

辺境で惑星疎らな宇宙空間に一隻の宇宙船が高速で移動、する“メイトランダ号（M号）”それを追跡しつつ砲撃する宇宙船団。M号をかすめる無数のビーム砲の雨、その一部が左翼をかする。M号内、大揺れの船内、床に叩き付けられた乗組員多数。M号司令エリアで、「ラーナ姫！このままでは、敵バルダーの餌食に…」「前方に巨大デリーム空域が出現！」M号前方に広がる巨大暗黒雲とプラズマ飛び交う風景。

魔空戦士②

「こ、こんなときに…くそう、逃げ道は無しか！」「航海長！デリームへ向けて全速前進！」「デリームへ？…しかし姫！デリーム空域へ入って生還したものはいません！」「このままでは敵の手に落ちるわ！ならば…」「了解！…デリーム空域へ全速前進！」デリーム空域へ入っていったM号。とあるバルダー船、司令エリア。「敵船はデリームへ突入しました」「馬鹿な！自殺を選ぶのか！…」

魔空戦士③

デリーム空域のM号。船体は左右にバランスを崩し揺れ、プラズマがしばし船体を襲う。M号司令エリア。「船内Ａ地区，Ｃ地区で火災発生…消火班出動せよ！」船内、廊下豪火を消す乗組員達。「第三区域、船体に亀裂…」プラズマが船体の側面をえぐり取り外に放り出される２、３人の乗組員。「航行装置、作動不能…このままでは危険です」「な、なんだ…あの光は！」そして巨大な閃光が船体を覆った。

魔空戦士④

M号は静寂の宇宙の中を静かに進む。司令エリアでは、乗組員は皆、気を失っていたが、そのうちの一人が目を覚ます。「ここは、いったいどこなんだ」ラーナ姫も目を覚ます。「ん…静ね？デリームを抜けたの？…ジム…現在地は」レーダーボードを魅入るジム。「デリームです…まだデリーム空域の中かと思われます」「デリームの？こんな、穏やかな世界がデリームの中の？」

魔空戦士⑤

その時レーダーボードを見るジムが叫んだ。「惑星だ！前方に惑星確認」「デリーム空域のど真ん中に惑星？…そ、そんな馬鹿な！」巨大カクリーンに写し出された地球。「まあ…なんて美しい星！」「ティナ…その惑星に降りましょう…船も損傷が激しいし、皆も休養が必要よ」「了解！」惑星に急接近するM号。

魔空戦士⑥

地球の地上部、岩山の洞窟に、男３人、女２人が潜んでいる。一人の女が隼にエサを与えている、話しかける男。「カティ…良く馴れたもんだな！」「ジュディとはヒナの時から一緒だからね」小型通信機を動かす女。「美奈、どうだ」「やっぱり駄目…この辺りも通信不能よ」「み、美奈…通信を切れ！」岩山の上空に３機の偵察ロボットが近付いた。（偵察ロボット、リービル）洞窟の中では、人々が息を殺し機銃や手榴弾などの装備をしている。「今の無線を傍受されたか？」

魔空戦士⑦

上空の３機のリービルが旋回している。その操縦席で、「この辺りで無線反応が…」「カーツ また、誤報じゃないか？…この辺も電波障害が多いからな」「一応…降りて調べてみるか？」「わかった」２機のリービルが岩山に降下し始めた。洞窟の中。「くそう！仲間が待つイプセンの町までわずかと言うのに」「奴等…俺たちを見付けたのか？」「いいえ…彼等もレーダーはつかえないはずよ…正確な位置は分からないわ」

魔空戦士⑧

着陸した２機のリービル。「カーツ、俺は反対側を調べる」「わかった」２機は二手に別れた。そのうち１機が例の洞窟を見つける。「あんなところに洞窟か！」カーツ機はゆっくりと洞窟に近付いていく。洞窟の中。「どうする孝夫、出て戦うか？」「フフ…ニードル、援護頼む！」「孝夫…どうする気だ！」「あいつを奪うのさ」「なに？無茶な！」

魔空戦士⑨

女が心配そうに孝夫に駆け寄る。「孝夫！…気を付けて」女の頬にキッスし、「美奈…イプセンに着いたら結婚しよう」「孝夫…！」孝夫は岩肌を擦り抜け飛び出していった。洞窟の口まで歩み寄るリービル、洞窟の付近を追うリービルのセンサー。ニードルたちは大型機銃を構え洞窟を飛び出した。リービルに向けて両脇から発砲した。一方、リービル操縦席。「見付けたぞ…レジスタンスめ」リービルもそれに応戦、ニードルたち目掛け砲弾を放つ。上空を旋回中の１機から岩山斜面に爆発を見付ける。「どうしたカーツ！…見付けたのか」「ザザザー」「くそう、電波障害か！」「オルドリン…聞こえるか？」「こちらオルドリン」「カーツが１１５地点で敵と遭遇したらしい」「了解…至急援護に向かう」

魔空戦士⑩

バルダー軍、前線基地。管制塔、オペレーターの女が数人いる。「帝王、偵察中のリービルから救助要請です」「逃走中のレジスタンスを発見、交戦中との事です」その後部に黒い影の男が座っている。「援軍を派遣せよ！」「はっ！」リービルの攻撃で洞窟周辺の岩山が崩れ落ちていく。ニードルたちはリービルの砲弾を交わしながら洞窟から遠ざかっていく。「リック、リービルを洞窟から遠ざける！行くぞ！」「了解」

魔空戦士⑪

リービルの砲弾がニードルの足下の岩に直撃。落下するところ片腕で岩をつかみ宙ぶらりんとなる。孝夫、険しい岩盤の頂上に潜んでいた。リービルがその下を差し掛かったとき、その頭部の操縦席に飛び掛かった。ニードルに止どめをささんと弾丸を打ち込む体勢のリービル。その時リービル頭部にある操縦席のカプセルが開く。孝夫が操縦席に侵入、カーツ銃を取り出し孝夫に発砲、微妙に逸れる。「えーいっ！」孝夫の短剣がカーツの胸元を貫いた。

魔空戦士⑫

そこへオルドリン機が急接近。「カーツ…奴等は？」その時、オルドリン機のセンサーが地面に倒れているカーツを発見。「カ、カーツ、…き、貴様！…カーツを！」２機は砲弾を発しながらの空中戦へ、やがて海上へ抜け出す。そこへ合流した最後の１機「隊長…カーツはこいつにやられちまったらしい」「何っ！」挟み撃ち、２機のリービルの砲弾に防戦一方の孝夫機。不意を疲れハガイジメにされる。光の剣を構えたリービル、猛然と孝夫に襲い掛かる。

魔空戦士⑬

上空を仰ぎ祈る美奈たち。「孝夫！」次の瞬間孝夫機は全動力を切った為ハガイジメしていたオルドリン機にその重さが加わり一瞬バランスを失った。そして即座にエンジン全開。まんまと２機のリービルを激突させ難を逃れた孝夫機。アーク剣を取り出し怯んだ２機を貫き、その場を離れる孝夫機。大爆発を起こす２機のリービル。「やったぜ！」「孝夫！」とはニードルの声「しまった！」岩山では忍び寄る敵シャトルから放たれた地上部隊が洞窟周囲を占拠していた。大空に逃げる隼。リックが銃弾に倒れた。

魔空戦士⑭

機銃を突き付けられるレジスタンスたち。「美奈！」「孝夫！…危ない」海中より突如現れた異種ロボットのセイロスの剣が孝夫機の肩口をバッサリ。「うわっ！」孝夫機は揺らぎ、落ちていく。海中へ落ちた孝夫の乗るリービルは大爆発を起こす。「孝夫！…孝夫！」「指令！こいつらを処刑しますか？…いや待て！帝王からは生け捕れとの仰せだ」泣き叫ぶ美奈とニードル、カティは強引にシャトルに押し込まれる。やがて、美奈たち捕虜を乗せたシャトルが飛び立つ。

魔空戦士⑮

宇宙船内で目覚めた孝夫。「ここは？…ううっ！」頭を抱える孝夫。「私はラーナ…申し訳有りませんが…あなたの記憶を少し調べさせてもらいました…頭痛は自然と直ります」「記憶を？…俺をどうするつもりだ！…い、痛っ」「あなたに危害を加えるつもりは有りません…記憶を調べたのはあなたの持つ知識とあなたと話す言語解読をするためです」「それに私達は、あなたの考えるバルダーとは敵国…メイトランダ連合なのです」

魔空戦士⑯

銀河系の宇宙空間に浮かぶ二つの大船団、双方からビーム砲が打ち込まれる。「メイトランダとバルダーが全銀河を巻き込んでの戦争に発展して…百年余り」「強力な軍事国家バルダー軍に対し我がメイトランダ軍はわずかな軍備ながら、同名諸国の結束でバルダーの横行を阻止してきました」「しかし、２年前バルダー軍が戦争の一挙終結を狙った新兵器、超次元変動弾マクレイサーの使用が裏目に出てしまったのです」「その影響で銀河全土が危険にさらされる形となったのです」「銀河の大半はマクレイサーが生み出したデリームと呼ばれるブラックホール的危険空域に飲み込まれてしまったのです」「２年前？この地球にも天変地異が起こった頃だ、その影響かい？」「ええ」「私達はデリーム探査航行中…敵船団に攻撃されこの惑星に辿り着いたのです」

魔空戦士⑰

牢の中の美奈とカティ。涙が枯れ果てた感覚の美奈。「孝夫！…私」「美奈…孝夫の事だから、きっと生き延びてるわ」「カティ…」カティに抱き着く美奈。「私達これからどう成るんだろう」そのときニードルが牢に投げ込まれるそれを抱き留めるカティ。「こんな酷いことを」牢番が話す。「御前達は仲間が揃ったところで見せしめに処刑されるのさ」「すまない…イプセンの事知られちまった」「いいのよ、記憶を覗かれたんでしょ？…仕方無いわ！」牢の明かり取りの窓に隼が舞い降りた、カティもそれに気付く。「ジュディ…おまえ良くここが」気を取り直した美奈はジュディの足の怪我を見て手を差し延べる。「酷い怪我…こっちへいらっしゃい」

魔空戦士⑱

～イプセンの街、ゴーストタウンのように荒れ果てた街、人影がない。広場に小型探査船が着地する、探査船から降りる孝夫とラーナ、彼女の護衛の二人の兵士。「カールマン…俺だ！孝夫だ」廃墟より出てきた銃を構えた男達が孝夫たちを取り囲んだ。その中からカールマンが一歩前に踏み出し孝夫に握手を求めた。「孝夫！無事だったか？岬の方で爆発が合ったんで心配したんだが…」「それで…この人達は？」「心配いらん…俺の命の恩人さ」「それより、ニードル達が捕まった…やつらじきにここへもやってくるはず」「わかった…デロップ！出発の用意を」「はっ！」

魔空戦士⑲

廃墟内の一室で、カールマンと話をするラーナたち。「私達にもバルダーを倒す手助けをさせて下さい」「姫、私達の任務はデリームの調査のはずです…こんなところで寄り道など」「お黙り為さい、この地球の美しさをバルダー軍の手で汚してはいけない」「ジム…御前もバルダー軍の卑劣なやり方は知っているでしょう」「それに…私は何故この地球が、デリームに飲み込まれながら、生き続けるのか知りたいのです」その時、イプセンの上空にリービルの編隊が来襲。爆音がカールマンたちの部屋にも飛び込んだ。「カールマン、敵襲だ！リービル十数機の編隊だ」「くそう、遅かったか！…止む終えん、臨戦態勢を取れ！エアー戦車部隊出動」

魔空戦士⑳

上空から飛来するリービルそして着陸したシャトルから降りる地上部隊。地上部隊どうしの銃撃戦。大型機銃を装備した数機のエアー戦車とリービルの戦い。バルダー、レジスタンス双方に死傷者続出。そして、機銃を手に部屋を飛び出す孝夫をラーナが引き止める。「孝夫さん…あなたリービルの操作が出来るわね」「ああ、ちょっとぐらいなら」「じゃあ…来て」リービル部隊とレジスタンスの銃撃戦が続く。墜落するエアー戦車やリービル。イプセンの街は戦火の中、跡形もなく崩れていく廃墟
。上空待機の探査船から放たれたロボット、孝夫の前に着地した。「孝夫さん…メイトランダの戦闘ロボット、アークサイザーデュロスよ」「操縦カプセルにワッツ大佐がいるわ！彼から操縦法を習って！」

魔空戦士21

デュロスの胸部の操縦カプセルが開いた。カプセルからのびる光の帯に乗って孝夫はカプセルに乗りこんだ。「こ、この操縦席は？操縦桿も計器も何一つない…どうすれば言い」その時、後部座席に乗り込んでいたワッツに気付く孝夫。「フフフ…驚いたかね孝夫くん！デュロスは君のイメージで動かすのだ」「イメージで？」「カールマン、エアー戦車部隊全滅ここも持ち堪えられない。時期落ちる…早くここを逃げてくれ！」

魔空戦士22

滞空より光が２機のリービルを切り裂いた。「こりゃ凄いぜ！…リービルの動きなんか問題にならないぜ」「ど、どうした…あの白いアークサイザーは…」「識別不能…レジスタンスにあのような秘密兵器があったとは！」デュロス操縦席。「孝夫君！デュロスはもともと、デリーム探査用に開発したロボット」「だからデリームでは不利なレーダーをはじめあらゆる装置が無いのさ」カプセル内の人間に震動が伝わる。

魔空戦士23

「デュロスの操縦カプセルは外界の情報を忠実に増幅し操縦者に伝える」「操縦者の目や耳がデュロスのレーダーでありセンサーなのだ」「そして、デュロスを動かすのも装置じゃない、君自身のイメージと精神力なのだ。「君の思い浮かべた動きをカプセルが感じ取りその通り動く」３機目も胴を切り裂き大破。「あああああーっ！…やめろっ」天空に振り被り残る１機のリービルを真っぷたつに切り裂いたデュロス。大破するリービル。それを見て撤退するバルダー兵たち。

魔空戦士24

デュロスを前に、握手を交わすカールマンとラーナ。「我々も旅立たねば成らん…それに決心したよ世界中のレジスタンス結集に」「カールマン…俺はデュロスでバルダーの野望を食い止める」「一刻も早く援軍を待ってるぜ」「ああ、きっと…」その時、孝夫の腕に降りる隼「御前はジュディか？…ん…怪我したのか？」ジュディの足には美奈のリボンが結ばれていた。「これは、

美奈のリボン！…ジュディ、美奈は！他の皆は無事なのか？」「美奈…いつか、きっと助ける…それまで生き延びてくれ！」

魔空戦士25

バルダー軍前線基地では、「帝王、探査衛星よりデータ入手」「レジスタンス側に新型アークサイザー出現」「どうやら、奴等にメイトランダの残党が手を貸したものと思われます」「何！…メイトランダの残党とな…それは厄介な！」「ナビニス少尉を呼べ…」「はっ」「敵には我が軍の最新アークサイザー、セイロスをぶつけようぞ」「はっ！」

ＥＮＤ

竜神紗代

竜神紗代①

富士の裾野、一人の僧侶が森深い山道を歩く。森の切れ間に辿り着く。その中央に洞窟がポッカリと口を開ける。洞窟には金属製の扉の残骸が所々に散乱していた。残骸の一つに龍神をかたどった紋様が見える。僧侶、残骸を手にとりつぶやく。「遅かった！…やつらは既にこの世に復活したか…ここも裳抜けの殻！」洞窟の中から不穏な空気を感じ取った僧侶。「ん、まだおるようだぞ！」洞窟の中にいたものが僧侶目掛けて飛び掛かる。それを迎え撃つべく身がまえる僧侶。富士の麓の洞窟。僧侶の周りに無数の鬼の屍が転がる。右手に持つ水晶玉を懐に終い歩き出す。

竜神紗代②

龍神沼に一人たたずむ紗代。右手に持つ水晶玉を右耳に当てている。そこに紗代の兄仙吉。「紗代、やっぱりここだったか！」後ろに立つ仙吉の方へ振り向く「兄ちゃん」「また、その水晶玉かい…いい加減、そんなもの捨てちまえよ！」「兄ちゃん」「その玉は御前がこの龍神沼で捨てられていた傍らにくるまれていたもの」「そんなの捨てろよ…御前を捨てた親の事なんか忘れちまえ！」

竜神紗代③

「ごめんね…でも、最近この玉がときおり光り出して私に何か伝えようとしてるの」「その玉が喋るって言うのか？」「ちがうわ…でも龍神沼でこうしているとその感じが益々大きくなった」「何か不吉で…恐ろしいものが近付いてくるって！」「不吉で恐ろしいものって…どんな？」「わからない…でもそれが間もなくこの村に来るわ！」

竜神紗代④

月夜。やがて黒い雲が月を隠す頃。寝付かれない紗代。枕元に水晶玉を置いていたが突然光り出す。はっとする紗代。家の外がザワザワとしている。暗闇で光る無数の目。外に繋いであった犬が吠えている。飼い主がそれに気付き「シロめ！こんな夜更けにほうおって」飼い主が外に出るとシロは闇の中初めは立っていたが瞬間バタッと倒れ落ちる「シ、シロどうした」

竜神紗代⑤

月を隠していた雲が離れ姿を現した無残なシロの死体。そして、その後ろに立つ巨大な鬼。飼い主は恐怖の余り悲鳴に成らない声を上げ腰を抜かしてその場へへたり込む。うわーあ！と飼い主の悲鳴、飛び掛かる無数の鬼達。鬼達は大群となって村を横切る。あちこちの家で鬼達は人々を襲っていた。

竜神紗代⑥

一方、紗代の家にも数匹の鬼が上がり混む。仙吉クワを構え両親と妹との紗代をかばい鬼達を威嚇する。仙吉はクワを振り回し鬼たちを戸の外に追い出す。仙吉が戸を締めた瞬間戸板を突き破って鬼の腕が仙吉ののどぶえに掴み掛かった。「せ、仙吉…」「に、兄ちゃん」仙吉は「さ、よ…はやくにげろ！」といいつつ戸口に凭れ掛かり事切れる。鬼達は戸口を破り侵入してくる。残る親子三人に狙いをつけた鬼たち。年老いた両親が紗代をかばう。「お、おまえは死んでは成らん！」「父ちゃん」

竜神紗代⑦

紗代を裏戸の外に押しだし戸を中から締める。「父ちゃん、母ちゃん…あけて、あけて！」戸をドンドンと泣きながら叩く紗代。「は、はやく逃げるんだ！」「紗代…グフッ」家の中から年老いた両親の悲鳴。他の鬼達がそして裏戸を破り出てきた鬼に囲まれ絶体絶命の紗代。そのとき紗代が胸元に忍ばせていた水晶玉が突然光り閃光が走る。光は鬼達に向かって打ち込まれる。鬼たちは閃光に次々と切り刻まれ、貫かれ死んでいった。少女は力尽きその場に倒れ落ちた。水晶玉は光り倒れた紗代を覆う。その光はふわっと浮き上がり森の奥へと飛んでいった。空を飛ぶ光の玉。龍神沼の岸で光は降りる。

竜神紗代⑧

光りの中、紗代の回想。「紗代、紗代、起きなさい」「う、うん…だ、だれ私を呼ぶのは？」紗代の前に姿を現した全身が金色に女。「あなたは？」女は見る間に巨大な龍になっていく。「この村に住む龍神…御前を迎えに来たのです」「御前は私の子、１３年前この村の子の出来ない夫婦に託した子」「わ、わたしが龍神様の子と言うの？…お母様？」「もう猶予は成りません！この国に太古、私達龍神族が封印した鬼神たちが…封印を破り再びこの世に復活したのです」「龍神族はこの国の人を守る定め」「守るって私には何の力も…！」その時、紗代の前に現れた短剣。「この剣を使いなさい！」「これは？」剣を手にする紗代。「龍神族の神通力を封じ込めた龍魂刀…」

竜神紗代⑨

そう言うと龍はその刀の中に吸い込まれていく。「か、母様！」「母が御前にしてやれる最初で最後の事、龍魂刀は母の魂自身なのです」「わが、愛しい子紗代…鬼神から人々を…守るのです！」光りは消えていく。龍神沼で目覚めた紗代、傍らには光り輝く短剣があった。短剣を手にした涙を流す紗代。「母様！」

竜神紗代⑩

鬼達が村人から取り上げた酒や食べ物を食らい宴を催している。「夜叉丸たちはまだ戻らんのか」「なに、あいつらのことじゃ、きっと俺達に抜け駆けして他の村の人間達を食いに行ったんじゃろう」「今日の村は年寄りばかりで旨くなかったからな」「明日は若い人間のいる町まで、繰り出すかのう」「そうじゃそうじゃ！ワシは若いおなごが大好物じゃ」宴会の席に投げ込まれた

物は鬼の右腕だった。「こ、この腕は夜叉丸の腕！」

竜神紗代⑪

「お、御前はだれじゃ」「ん、人間のおなごじゃ」「ま、待て桃閣棒」一人の鬼が少女に駆け寄る。スパッと首が切られ落ちる。「御前が夜叉丸を？…御前…人間では無いな！」「私は龍神紗代、御前達鬼神を倒す宿命の女！」「ふっ…面白い、鬼神こそこの地上を支配するにふさわしい種族！」「貴様のごとき小娘…捻り潰してくれるは！」ボス格の鬼神の合図と共に一斉に紗代に襲い掛かる無数の鬼たち。

竜神紗代⑫

鬼たちは我先に紗代目掛けて襲い掛かる。鬼達に推し潰されたかに見えた瞬間、光が鬼達を吹き飛ばした。輝く水晶玉を手に頭上に掲げた光りは四方に飛び散り怯んだ鬼達の体を貫く。「お、おのれ！」次なる鬼の集団が迫る。水晶玉から無数の光り輝く大蛇が鬼達を食らう。大刀を振り回し向かってくるボス格の鬼。（４本の腕を持ちそれぞれの腕に剣を持つ）「その様なまやかしなど…この力王鬼さまには通ぜぬぞ」

竜神紗代⑬

水晶玉から現れる光りの大蛇を４本の剣で打ち砕き猛然と紗代に襲い掛かる。４本の剣を次々に振り翳す力王鬼、すんでで交わした紗代。カキーン、と計三度刃先を擦り合わせる。力では数段上の力王鬼の強引な剣裁きに後退りしながら交わす紗代。紗代、再び光の大蛇を放つ。「ばかめ！その様なまやかしが俺様に通じるとでも」
光を軽く刀で振り払った瞬間、輝きが力王鬼の目に入る。「うわっ！め、めが！」フワッと鬼の頭上に飛び上がる。紗代を見失った力王鬼「小娘めどこに行った！」落下すると同時に短剣を握りボスのこめかみに突き刺す。「両親と兄の敵だ…覚悟！」ギャーア、力王鬼の傷口から閃光が輝きその顔は見る見る崩れ落ち、頭蓋骨がさらけ出しやがて灰と化していく。粗い息遣いの紗代。

竜神紗代⑭

断崖にたつ怪しい城に続々と入場する鬼の大群。鬼神王の玉座の間。「鬼神王、お帰りなさい！」「おお、白髪鬼！久しいの！」「小賢しい龍神の術に封じ込められし我身…御前達の働きで再び自由の身になれた」「いえ私共はなにも…ただ人間と言うもの欲には弱いと見えて、金をちらつかせ、我が一族では手だし出来ぬ龍神の術を打ち破らせたのです」「おお、そうか…その様な信用出来ぬ種族、龍神族同様根絶やしにしてやるは！」一方、旅支度を整えた紗代。生まれ育った村（廃墟）を眼下に歩き出す。

ＥＮＤ

魔界警察

魔界警察①

マンション。管理人と男が扉の前に立つ。ドンドン！「冴島さん！冴島さーん！」「開けて下さい」と男が頼む。マスターキーを使う管理人。扉が開く、中は電気がついているものの人のいる形跡がなく、まどりを捜し始める男、おそるおそる着いてくる管理人。「け、刑事さん…」ポタッ、ポタッと何かの雫が落ちる。バスルームのドアが少し開いていて、雫が落ちる音が洩れている。刑事がドアを開けた瞬間、刑事の顔色が変わった。「お、遅かったか？」浴槽の中で血塗れに成って殺されていた裸体の女、冴島薫。

魔界警察②

冴島のマンション、現場検証が行われている。刑事たちが３人集まっての会話。「また垂れ混みがあったそうだな」「ええ、これで三件目です…どの娘も今売り出し中のアイドル歌手」「今回も…女が殺される守ってほしいと男の声で電話がありました」「その男とアイドル歌手との関係はなんなのだろう？」もう一人の刑事が歩み寄り「課長…おまけに今度の被害者も心臓を抉られています」「なに？…またか！…心臓を抉るとは、よほど恨みを持つものの犯行か」

魔界警察③

東都芸能事務所、出てくる二人の刑事。「被害者の冴島薫は、明るい性格で誰からも可愛がられるタイプだったそうです」「決して人から恨みをかうなんて考えられないと…」「しかし、他の殺された娘たちも恨まれる心当たりはないという」「一人住まいの女の子を狙う変質者の犯行か？」アイドルの実家で通夜が行われている。泣き疲れた母親、父親から事情を聞く刑事。「曲がヒットしてこれから歌手として頑張ろうっていう矢先でした…なのにだれが薫を！」「む、惨い…あああああーっん」娘の遺影の前で泣き崩れる母親。

魔界警察④

冴島薫の家から出てきた二人の刑事。「刑事さん」と呼び泊める声。「な、なんだ、水沢クンか！」登場した女「なんだ…は無いでしょう…なにか新しい情報は入った？」凄味を見せて、「ノーコメント！…君も事件記者なら自分でしらべろよ」刑事の顔を見詰める女、少し照れる刑事。「フフ…その顔を見れば収穫なしね」「なにを！」冴島家から出てきた男に視線をやる女。「今出てきた男…誰かわかるかしら？」「志摩としお…今売り出し中の作曲家、それと…被害者共通の作曲家よ」「なに！」志摩の悲しげな表情。

魔界警察⑤

喫茶店に若い刑事が入ってきた。奥の席で手を振って合図するリヨ「立野さん！こっちこっち」「リヨさん…どうも！」迎え合わせのリヨと立野「当日の志摩としおのアリバイは完璧だっ

たよ」「芸能プロの主催するパーティに出席していた」「やつが事件と関係ないとするといったい誰が？」「まって、立野さん…実はもう一人、志摩としおの作曲した曲を歌っている歌手が居るのよ…沢田なつき」「沢田なつきって、トップ３の常連のスターか！」「彼女を張り込んでみない？」

魔界警察⑥

沢田なつきの住むマンション。車で張り込む立野刑事と助首席にリヨ。忍び寄る黒い影が窓からなつきの部屋に入っていった。「あ、あれは！」「ん！リヨさんどうかした？」リヨ、少しおどおどして見せる。「えっ！ち、ちょっとトイレ…マンションの借りよっと！」あわててマンションに駆け込むリヨ。

魔界警察⑦

シャワーを浴びるなつき。バスルームの天井にへばりついている影はやがて鋭い鍵づめとなってなつきの後ろから迫り来る。マンションの廊下を走るリヨの耳に飛び込む女の悲鳴。リヨが左腕を中段に構え右手でブレスレットをつかむとブレスレットから光が溢れリヨの服装は忍者のような黒装束に変わる。非常口からこっそり出てきた女。サングラス等で変装しているがどうやら沢田なつきであるのを見抜く立野。「沢田なつき…今頃変装してどこへ」

魔界警察⑧

出ていくなつき赤のスポーツカーを走らせる。「リヨさん遅いな！…にげられちまう」立野刑事も後をつけることに。バスルーム必至の形相のなつき。影は上半身の人間のような姿に変わる。腕はなつきの首元を掴み。「おまえは沢田なつきではない！…なつきはどこへいったのだ！
言えっ！」バスルームに飛び込むリヨ。「なつきさん！」

魔界警察⑨

天井の黒い化け物を確認したリヨ。「なにものだ貴様」リヨはブレスレットを外し黒い化け物目掛けて投げ付けた。ブレスレットは帯状に変わり化け物の右腕を貫いた
「おのれ…おまえは人間ではないな！」化け物はリヨ目掛けて液体を吐き欠けた。避けたリヨ、溶け落ちたバスルームの壁。天井のわずかな隙間から逃げていった影。
放心状態の女に駆け寄るリヨ。「あなた…沢田なつきのマネージャーね」「なつきはいまどこに居るの！」リヨは女の目を凝視する、催眠術で虚ろなまま話し始める女。「なつきは作曲家の志摩としおのところへ行きました」「二人は恋人です…私はマスコミの裏をかくために、替え玉になって深夜の密会を手助けしているのです」「そう…わかったわ…あなた今遭ったことは忘れるのよ」「あの黒い化け物のこと、私に会ったことも」力尽き前に倒れ混む女。

魔界警察⑩

深夜営業のスーパーに買い物をするなつき。志摩のマンションへ横付けされた赤いスポーツカー

。山ほどの買い物袋を抱え入っていくなつき。少し離れた所からなつきの一部始終を観察する立野刑事。エレベータを待つなつき。エレベータの扉が開くと一人の女が乗っていた。

魔界警察⑪

ピアノを演奏する作曲家、志摩の影にやがて悪魔の影が入り込む。そして、悪魔の影が志摩に話しかける。「人気作曲家に成った感想はどうだい？」頭を抱えて叫ぶ志摩「頼む、俺の体から出ていってくれ！」「フフ…そうはいかん、これは俺との契約だ！」「曲のヒットとそれを歌うアイドル歌手の命との引き替えだ！」志摩と影の悪魔の会話が続く「御前は俺のメロディを使って人気作曲家になれたのだ」「俺のアドバイスなしでは売れない作曲家のままだった！」「彼女は駄目だ、許してくれ！おれは彼女を愛している…だから」「沢田なつきの事か？…フフ、俺との契約に例外はない！」

魔界警察⑫

玄関のチャイムの音。「な、なつき！」悪魔の影は引っ込み「いいか、おかしな真似はするなよ！…その時は御前の命も無いぞ！」玄関先で待つアイドル沢田なつき。サングラスとかつらで変装をしている。扉を開けなつきを迎え入れる志摩。「なつき！」サングラスを少しずらし、「センセエ…」「おまえ？なつきじゃ…ない…いったい誰？」なつき、ドアの内側にすかさず入り込み。

魔界警察⑬

女の額に突然浮き出し輝き出す魔法陣的紋章。志摩、その影に潜む悪魔が思わず呟く。「そ、その紋章は！」額の輝きが増し志摩を照らし出すと志摩は気を失った。そして悪魔が姿を現した。「おーのれ！さっきの女！」「私は魔界警察のリヨ！…悪魔ビゼスね、魔界の王の命により御前を抹殺する」リヨは左腕に巻き付く帯状の剣（スネークサーベル）を手にした。「こしゃくな！」

魔界警察⑭

ビゼスは口から束になった触手を吐き出しリヨをおそう。紙一重で触手を避けるリヨ、触手は壁に突き刺さる。左腕から解き放たれた帯はビゼス横っ腹をかすり鮮血を呼ぶ。次々とリヨ目掛けて伸びてくる触手を交わすリヨ。スネークサーベルを駆使してそれらを払い除ける。次の瞬間剣はするするとビゼスの首に巻き付く。素早くビゼスの後ろに回り混み「悪魔ビゼス！魔界に戻れ！」リヨは掛け声と共にビゼスの首に巻き付く帯剣の刃先を一太刀動かした。ビゼスの首はスパッと切れ前に転がった。

魔界警察⑮

死闘が過ぎ、リヨの額の紋章は消えていった。リヨは十字を切るとビゼスの死体と散乱する鮮血は、光のリングに囲まれやがて消えた。修羅場と化していた志摩の部屋、ビゼスの痕跡はもう

無い。倒れている志摩をソファに下ろすリヨ。リヨ両手を握り祈る。「魔界の王よ！悪魔ビゼスの汚れた記憶を人々の記憶から消し去りたまえ！」魔界の王の巨大な偶像の目が光り、闇夜に無数の流れ星が流れた。リヨ何かに気付き何処かへ立ち去る。

魔界警察⑯

気を失っていた志摩の元に本物の沢田なつきが訪れる。「セ、センセエ…こんなところで寝てちゃ風邪引くわよ」意識を取り戻した志摩。「な、なつき？」「おれは今まで何を」張り込んでいた立野刑事キョロキョロと辺りを見回す。「あれ？どこだここは…おれどうしてここにいるんだろう？」そこにマンションから出てきたリヨ。「立野さん…お待たせ」「あれ、リヨさん…どうしてここに」「どうしてって…取材よ…取材が終わったら夕食に行こうって誘ってくれたでしょう？」立野の車に強引に乗り込むリヨ。「おれが？…そんな約束してた？」「いいから…出発！」しぶしぶ車を走らせる立野。「それで…なんの取材だったの？」「フフ…内緒！」

ＥＮＤ

虚空の剣士

虚空の剣士①

〜千年の昔。天まで噴煙を上げる霊峰富士。太陽光をさえぎり薄闇の地上。朽ち果てた村では、子犬大の３匹の魔物が死肉を食らう。盗賊が死人に群がる魔物の首を落とし死人の金品をはぎとる惨憺たる光景。

虚空の剣士②

街道を若い娘と二人の共の侍が早足で歩を進める。道端。草影がザワザワとした瞬間、二匹の魔物が襲い掛かる。グワァァー！不意を突かれた侍の一人が喉ぶえを噛み切られ倒れる。「姫っ！」もう一人の侍が若い娘をかばいつつ刀を抜き払う。「姫…ここは、わたしが…お逃げ下さい！」娘は、街道を外れ林の中に走り出す。「化け物！わたしが相手だ…こいっ！」侍は、魔物に切り掛かっていった。林の中。巨木の根元にたどり着いた娘。息も絶え絶えでヘタリ込む。ギャー！街道のほうで男の悲鳴。おびえる娘、恐怖のためか身動き取れず。魔物が娘に飛び掛かるキャー！瞬間、刀の反発する火花。バサッ！一匹の魔物の頭が娘の前に落ちる。

虚空の剣士③

娘の前に現れた現れた若侍。残る魔物が若侍目掛け飛び掛かる。バサッ！十文字に切り刻む早業。「俺はリョウガ！賞金稼ぎさ」「あんた名は？」「シズ…美篠の国のシズ姫です」「我が兄を頼って、美山の国を目指しているのです」「どうか私を守って美山の国まで連れていって下さい」「御礼はいずれかならず」「へえ、お姫様かい…でもな！俺一人でとても守り切れないぜ」「ここは、魔物どもがうじゃうじゃいる」「美篠に引っ返して兵隊を連れてくるんだな！」引き上げかけるリョウガ。シズ姫、うっすら涙ぐむ。「み…美篠は黒い鎧武者たちに滅ぼされました」背を見せたまま「ん？」「黒い鎧武者？」「もう引き返せません…わたし一人でも行きます」
強引に歩き出すシズ。「おい、待てよ！」「無鉄砲な姫様だぜ！」

虚空の剣士④

夜、古寺に宿泊。「美山の国って言えば富士のすそのの国…おそらく闇の中だぜ」「闇に生きられるのは国を追われた罪人や盗賊それに魔物ぐらいだ」「あんたの兄さんも果たして無事かはわからないぜ」「でも、闇と戦いながら生き抜いている国もあると聞きます」「美山も…きっと」古寺の戸外。ガサッ！草を踏み潰す黒い影。障子越しのリョウガとシズの影へ近付く。

虚空の剣士⑤

胸騒ぎリョウガ、刀に手を掛ける。「シズ姫…」「リ、リョウガ様」リョウガが軽く抱き寄せる。瞬間、シズ姫目掛け障子をつき破り黒い影が侵入。犬程の大きさの四つ脚の魔物が二匹。それらを従えるように後ろに熊のような風体の化け物。前の二匹の魔物、次々とリョウガの首筋目掛け飛び掛かる。刀を振り払い逃れるリョウガ真っぷたつに。空きを満てしんがりの魔物も飛び掛かる。すんでで避けるリョウガの右肩から鮮血が滴り落ちる。「くっ！」「リョウガ様！」シズの悲鳴。

虚空の剣士⑥

再び、飛び掛かる魔物そして飛び散る鮮血。魔物の下顎にリョウガの刀が付き刺さる。魔物苦しみのあまりリョウガを振り切る。壁に肩を痛打した反動でリョウガ刀を手放す。血塗れになった魔物怯んだリョウガに飛び掛かる。リョウガ回転して刀に手を伸ばす。魔物リョウガの上に伸し掛かる。茫然としたシズ。

虚空の剣士⑦

シズの看病で目覚めたリョウガ。シズは上着の着物をリョウガにかけ、薄い着物一枚に成っていた。「シズ姫！おれは…いったい」「リョウガ様…よかった」リョウガは包帯の巻かれた腕を押さえ起き上がる。傍らには魔物の死骸が横たわる。

虚空の剣士⑧

峠の道。ドサッ！魔物が崩れ落ちる。魔物の死骸から刀を抜き取るリョウガ。「美山の国まであと峠一つか！」「シズ姫、どうした？」「少し熱が…でも大丈夫…急ぎましょう！」シズの額に手を当てるリョウガ。「酷い熱だ…」そこへ、薪を担いだ娘が通り掛かる。「どうかなさいましたか？」

虚空の剣士⑨

庄屋の屋敷。シズ姫「ありがとうございます…だいぶ楽になりました」「旅の人…どこから来なすった？」「美篠です」「美篠？…美篠はまだ闇に包まれておらんのか」「はい」「わしらもここを出たいんじゃが…」「じゃ、なぜ出ないんだい？」外。「お許し下さい」一人の百姓が侍にすがりつく。振り払う侍。侍、娘の手を掴んで連れていこうとしている。

虚空の剣士⑩

窓越しに見るリョウガ。「あれは？黒い鎧武者」「黒い鎧武者！」シズ姫が絶叫。「あれは美山の兵士じゃ」「あ、兄う…」シズはとっさに声を押し殺す。「年貢を払えないんで、娘を代わりに連れていかれとるんじゃ」「娘さんたちが人質ってわけかい」「若い者は皆、美山城に連れて

いかれ残っているのは年寄りばかりじゃ」「美山様は若君が原因不明の病に犯されてからひとがかわってしもうたんじゃ」「あの領民から信頼された美山様とはまるで別人じゃ」老人涙ぐみ「村に残る若い娘も孫娘のお竹の一人…次は御前の番じゃ」「おじいちゃん、そんなに悲しまないで…わたしまで…グスッ」リョウガとシズ姫お互いを見詰め会いうなずく。

虚空の剣士⑪

美山城全景。美山城城門の前。馬に乗った侍（リョウガ）とお竹（シズ姫）侍の懐にリョウガの物と同じ鈴がぶら下がる。「庄屋の娘、お竹を連れて参りました」城門がゆっくりと開く「ごくろう！入れ」侍「娘は預かる、ん？おぬし新入りか、見慣れぬ顔だが？」ビクッ！「…まあ良い」「宴の準備ができている…おぬしも早よう着替えて、大広間へ行け」「宴？」

虚空の剣士⑫

美山城内。侍に連れられ城内に進むお竹。竹が通されたのは地下牢。そこには４人の村の娘達が監禁されていた。「入れっ！」抵抗無く自分から牢に入る竹。「あ、あんた？お竹さんじゃない…」口に指を当てた仕草「しっ…」大広間では家臣達が一同に集まり宴会が開かれていた。席の上座に座る美山影清。『あいつが、美山影清…』「今日は我が子靖清の全快祝い、皆も飲んでくれ！」一方、地下牢では、「あんた、お竹さんの身代わりかい？」「ええ…でも私達はこれからどうなるのです？」「あたしたちは若君のお守り役さ」「お守り役？…」「若君の病を直す為の生贄なのさ！」

虚空の剣士⑬

席を立つ美山の後を追うリョウガ。美山の奥方の歌う子守歌の響く部屋に入る美山。天井裏から様子を伺う驚きの瞬間。奥方が抱く若君は既に白骨化していた。部屋を訪れる殿様「百人の処女の生贄を捧げれば若を助けられるのじゃ」「残るはあと５人…たった今、家臣に命じ娘達を奴の元に贈らせた」白骨に頬ずりした殿様「若も苦しみから解放されるのじゃ」「しまった！シズ姫！！」

虚空の剣士⑭

蔵の外形。５人の娘達蔵の中に手を縛られ放り出される。侍、蔵から出てガシャン！　扉を閉じる。一人の娘しまった扉にぶつかり泣き叫ぶ「あたいはやだあ、死にたくない！」「この部屋は？いったい…」キャー！蔵の奥にいた一人の娘の悲鳴。前方に光る目。「あの光は？」身の丈５～６メートルは有ろうか巨大な土くもだった。血塗れの娘をくわえて、ポタッ！と死体を床に落とす。「いやだあ！助けて」もう一人くもの糸が娘に絡み付く。糸を引っ張り混み二人目の犠牲者。ガクッと血を吸われ力尽きる。そしてシズの体にも巻き付く『リョウガ様！』スパッン！扉が真っ二つに切断。

虚空の剣士⑮

「シズ姫！」リョウガが登場。シズたちに絡み付いていた糸を刀で切る。「姫、外へ」「はいっ」「おのれ、化け物め！」数十のくもの糸がリョウガに襲い掛かる。素早く交わし、荷物の影に逃げ込む。荷物もろとも切り刻む針金状の糸しかし、リョウガの姿無く。ズパッ！リョウガ土くもの後ろから回り混み足二本がふっとぶ。ギャー！のた打ち回る化け物「化け物め！とどめだ！」刀を大きく振り上げるリョウガ。

虚空の剣士⑯

「待て！」「リョウガ様」美山がシズ姫をはがいじめに短刀を首筋に突き付けていた。「刀を捨てろ！」「美山！…シズはあんたの妹だろう」「リョウガ様！わたしの命よりそいつを倒して！」死んだはずの娘二人がリョウガをはがいじめに「御前達？」土くもが牙を鳴らしながら「美山もその娘達も我が動かしているただの操り人形よ」「リョウガとやら！気にいったぞ、御前の血を吸い尽くして我が僕にくわえてやるぞ」リョウガかんねんしたように刀を前方に投げる。リョウガに糸をはきかけ飛び掛かる魔物。シズ姫の悲痛な叫び「リョウガ様！！」グワァア…　見事魔物の腹に尽き刺さる刀。「おのれえ！」魔物は力尽きその場に崩れ落ちる。それと同時に娘達も美山もその場に倒れる。「兄上…」抱き上げるシズ。

虚空の剣士⑰

「シ…ズ…すまん」と言い残し絶命する美山。奥方の部屋。「ぼうやが！」白骨の若君が灰と化す。ばたばた倒れていく家臣達。馬鹿笑いして狂ったように城内を彷徨い歩く奥方。美山城は瞬く間に朽ち果てた廃墟に変わっていった。美山の里城を解放された兵士や娘達が返ってきた。「おっとー」「おお、お松…」抱き合って慶ぶ親子。

虚空の剣士⑱

美山の里を見下ろす峠道、石の墓前。手を合わすシズ。シズ急に立ち上がり笑みを浮かべ、「リョウガ様？わたくし、姫でも何でも無い一文無しの女」「あなたに御礼を差し上げられなく成ってしまいました」「せめてあなたの旅を御一緒して、身の回りの世話をさせて下さいな！」リョウガ歩き出す。「ははは…俺の雇い金は高いぜ！いつ返せるかわからんぜ！？」

ＥＮＤ

渓谷雪女

渓谷雪女①

雪がしんしんと降っている雪山。２人の観光客がガイドを伴ってやって来た。谷間の林の中にログハウスを見つける。窓からは明りが洩れている。青年が指差す「あそこです」３人は中に入っていく。中に二人の代議士と秘書が待っていた。ログハウスの中。代議士が窓の外を眺めつつ「このカヤス谷レジャーランドの計画も本決まりいよいよ来春着工ですな…社長！」レジャーランドの想像図バックに「２年後に、高速道そして新幹線が建設され県下一、いや日本有数のレジャーランドに成ることでしょう」

渓谷雪女②

社長、ガイドの田島ユウジに「大事な話が有るんで、君は、席を外してくれ」「わかりました小屋から薪を取ってきます」ユウジが出ると社長、部下に合図しトランクを代議士に掲げる。トランクの中には札束がぎっしり「これも福間先生の御陰です…これは私の気持ちです」

渓谷雪女③

ユウジ薪を取り外に出た。ふわっとした白いものが山林の奥で舞った。「ん？気のせいか」吹雪きは益々強くなる。ユウジが外から薪をもって帰ってきた。「お客さん、今日の下山は無理です。吹雪きが止むのを待って明朝出発しましょう」「そ、そうか、仕方がない」ログハウスを見詰める白い影。ユウジ暖炉に薪をくべようと投げ込んだ時、暖炉に父親と娘が並んで撮った写真を見つけ手にとる。「この人達は…ここの管理人してた家族ですね」ユウジ写真を客達のほうに向け。「この人達はいったいどこへ行ったんでしょうね？」「なんでも、行方不明になって３ケ月になるそうですよ」社長が怪訝そうに「そんなことは知らん！！」社長の部下が知ってる素振りで落ち着かない様子。ハウスの外、吹雪きが相変わらず降り続く。

渓谷雪女④

５人が寝入った頃、暖炉の火が細々と燃え続ける。回想、ログハウス内。「いくら金を積まれようとここは譲れない」「カスヤ谷は自然の宝庫、レジャーランドなんて作ったらたちまち自然は崩壊してしまう」思い余った社長は管理人の父を鈍器で殴り殺す。ぐたっとした後も滅多打ち。そこに居合わせた部下、その手を止めようとするが打ち続ける。「しゃ社長…な、なんてことを！！」明方、鮫島がうなされ目覚める。「うあああー！し、社長っやめ、止めて下さい！はっ」物凄い汗をかいていた「ふー！ゆめか！！」外は吹雪きが小降りになっていた。外に出た社長の部下防寒服を着込んで深雪の中を森のほうへ進んでいく。後をつける白い人影。

渓谷雪女⑤

朝、ログハウスでは鮫島が戻らず。「鮫島の奴、いったいどこへいったんだ！」ユウジ、防寒服

姿で外から戻ってきた。「谷と森の方を捜したんですが、見付かりません」ユウジ、電話口に歩き。「救助を頼みましょう」と受話器を取りダイヤルを回す。社長あわてて電話を切る。「な、何をするんですか！」社長怖い顔を作り「他人に知られては困るんでな！」「人の命が掛かってるんですよ！」「うるさい！君は余計な口出しはするな！」ユウジ、再び戸口に手を伸ばし出ていく。「わかりました！とにかくもう一度捜してきます」

渓谷雪女⑥

大きな杉の根元で穴を掘り起こす人影。鮫島が深雪を掘り起こしていた。そして掘り起こした所から人の手が現れる。ドカッと尻餅を付き溜め息を付く鮫島。鮫島の後ろに白い人影。付近の森に差し掛かっていたユウジ。ギャーア男の悲鳴を聞く。「ん！向こうか？」ユウジ悲鳴のほうに向かう。鮫島は横たわっていた。「さ、鮫島さん…」ユウジ、近寄ってみると鮫島はカチカチに凍って死んでいた。「こんなとこで、何をしてたんだ！」　鮫島の掘り起こしていた辺りにはもう一つの死体は無くなっていた。そこに落ちていた見覚えあるペンダントを拾い上げるユウジ「こ、これは！」

渓谷雪女⑦

回想デパート、アクセサリー売り場。ユウジと女の子がショーケースで物を物色していた。「あっ、これにしようっと」「静ちゃん…お父さんのプレゼントは欠かしたことないもんな！」「ユウジさんは３月だっけ？」「ひでえなぁ！俺は来月だぜ！」「あっそ！じゃ…ユウジさんのもついでに見ていく？」ユウジ苦笑い「俺はついでか！」「うそ！冗談だってば」

渓谷雪女⑧

ログハウス内。代議士が焦れる「遅い！…何時までまたせるんだ！」「申し訳有りません…もうしばらくお待ち下さい」「いいや…わしは帰らせてもらうぞ…明日は後援会の会合が有るんでな」帰ろうと出口に向かう代議士。社長は胸元からピストルを取り出し代議士に向けた。「おい！じょ、冗談はよせ」「このまま帰られたのでは、先生とわたしがここで裏取引をしたことがマスコミに知られてしまいます」

渓谷雪女⑨

「この私を射つ気か？」「いいえ、残って戴けるなら何もしません！」「鮫島が戻らないときはあのガイドの男も殺します」「なーにね！死体はこの深雪に埋めれば見付からないでしょう」「前にも、ここの管理人の死体を埋めて未だに見付からないのですから」「うわー！俺はいやだ！」その時、代議士の秘書が怖くなってか突然走り出す。ズドーン！秘書はその場に倒れ二度と動かなくなった。

渓谷雪女⑩

ユウジが戸口を明ける。「社長さん！電話を…鮫島さんは森の中で死んでいました」と戸口の側

に倒れていた秘書を見た。社長の手にピストルが握られていた。「あんたが、この人を？」「おお、まずいところを見られたな！」「鮫島は死んだって！…それじゃ君にも死んでもらおう…君に色々喋られるのは困るんでね」社長は銃口をユウジに向けた。

渓谷雪女⑪

その時入り口の戸を吹雪きが押し開ける。怯む社長そして、その前に現れた白い着物を来た少女。「な、なんだ御前は？」「し、静ちゃんか？」「やはり、御前が父を殺したんだね！…許さない」静の顔は恐ろしい形相で雪女に成る。社長はピストルを発射するが弾丸は霧を射つように雪女の体を擦り抜け。反対側の壁にめり込んだ。社長、恐ろしくなって残りの球を３発打ち込むが効果なく、雪女は社長に向け霧を吐き掻けると社長は見る見る凍り付いた。

渓谷雪女⑫

ログハウス内。代議士に照準を合わせる雪女「うわあ！た、助けてくれ」代議士は外に飛び出し逃れる。追う、雪女。逃げる代議士、足を取られ転ぶ持っていたトランクの中の札束が散乱する。「うぇ…！た、助けてくれ！」必至に拝みたおし札束のトランクを開け金を鷲掴みにする。「か、金なら幾らでもやる！…たた、助けてくれ！」と札を雪女に差し出した。

渓谷雪女⑬

雪女がしゃがみ混んだ代議士に近付く。ユウジが破って入る。「静ちゃん！もう駄目だ！これ以上、人を殺してはいけない！！」「ユ、ユウジさん」頭を抱え震える代議士を見詰める静の足が鈍る。その頃ログハウスに火の手が上がる。静は父の亡骸を抱き起こしログハウスに向かう。「し、静ちゃん…」火はログハウスを全体を包み混む。「ユウジさんサヨナラ！」恐ろしい形相の雪女は父の亡骸を抱いたまま火の中心に入っていった。

渓谷雪女⑭

「母さんのところへ行こうね」静の口許から白い霧が逃げ出す。その顔はいつしか優しい静の顔に戻っていった。火に包まれたログハウスやがて崩れ落ちる。朽ち果てて傾いているレジャーランドの計画用地の看板。ユウジ、ログハウスの有った辺りに花束をそっと置く。花束の横には管理人の家族の在りし日の写真が置かれている。

ＥＮＤ

モンスター

モンスター①

山深い谷間の森の中に隠れ里のような町並みが見える。その中央に聳え立つ険しく尖った屋根をした西洋風の城。〜アルタッシュ城。城内では兵士たちが酒を組み交わしている。一人の兵士が酒を浴びるほど飲み、恐ろしいモンスターに変身。もう一人の兵士が驚き。「お、おい…バルデンいい加減にしないか！」自重し、人間に戻った兵士。「変身は堅く禁止されている気を付けろ！」「す、すまん…つい」

モンスター②

大広間で貴族達が舞踏会の宴を催していた。舞踏会場の上座に王と王妃の二つの席、王妃は生まれたばかりの子を抱いている。貴族が王の前にひざまづく。「ラノス王！…念願の王子ご誕生おめでとう御座います」「ガロアか！…遠路はるばる、ごくろうだった」兵士宿舎、酒を浴びるほど飲みかなり酔っている兵士たち。二人の男が酒樽を持ってはいってきた。「王様よりの差し入れです」「おお、これはすまんな」男達、入口の隅に酒樽を置いてさっさと引き上げようとした。「まてっ！」男達の後ろ姿、一瞬ビクッと怯えてみえた。「まあ、御前達も飲め！」と杯を差し出す兵士。城内に不穏な空気の兵士たちの影。警備の兵士が見付け問い掛ける。「御前達！…止まれどこに行くんだ！」

モンスター③

ぐうっ…警備の兵士が声に成らない悲鳴を上げ倒れる。倒れた兵士の背中に刺さった剣を引き抜く銀の鎧の兵士。舞踏会場の席、あくびをして眠そうな顔の赤ん坊。赤ん坊に微笑み欠ける王妃。「あなた…もうぼうやのお休みの時間です、私達はこのへんで部屋へ戻ります」「そうか…もう一度王子の顔を見せておくれ」王子を抱き寄せた王赤ん坊に頬擦りした。兵士宿舎での悲鳴。

モンスター④

沢山の惨殺された兵士。一人の生き残った兵士が銀の鎧の兵のマントを掴んで叫ぶ。「お…おのれ、さ、酒にしびれ薬を…」容赦なく止どめを刺す銀の鎧の兵。舞踏会場まえの庭に入り込む一団。銀の鎧の兵の振りあげた手が合図となって一団は大広間に押し寄せた。迎え撃つ警備兵より数に勝る反乱兵が簡単に攻略。「反乱兵だー！…助けてくれ」パニックとなる貴族たち。無差別に殺戮が行われ逃げ惑う貴族たち、追う兵士たち。玉座の王立ち上がり「何事じゃ！」そして、王の周りを囲んだ一団。「ラノス王…命もらい受ける」「貴様達！…何者だ」一人のリーダーらしき銀の鎧を着た男が兜を取ってみせた。「お、御前は…レングル」

モンスター⑤

寝室の王妃と王子。傷付いた兵士がが慌てて入ってきた。「何事です…この騒ぎは？」「王妃様

…反乱兵で御座います…残念ながらラノス王も既に奴等の手に…」「あ、あなた！」　ふらふらとその場にひざまづいた王妃。側に支えていた乳母ミノスが王妃の両肩を支え。「王妃様…反乱兵たちがここに押し寄せるのも時間の問題かと…」ミノスが壁に掛けてある額縁を傾けると抜け道が現れた。抜け道は地下へ続く階段で中は真っ暗で人一人が通れる狭い道。「今は王子と共にこの抜け道より城外へお逃げ下さい！」

モンスター⑥

王子を抱き抱え抜け道の階段に一歩足を踏み入れる王妃。「王妃様…ここは私が食い止めます…はやく」「ミノス！…すまない」王妃が階段を降りていくと戸口は閉まり抜け道の中は暗闇となる。王妃は二度と振り替えること無く暗い地下へ伸びる階段を掛け降りていく。ミノスは見る見る醜いモンスターに変身し吠えた。王妃の足が瞬間止まった、しかし直ぐ思い直し駆け出した　「ミノス…許して！」

モンスター⑦

～１７年後、マロニアの街。巨大な三角屋根のテントが見える。沢山の通行人の中にネロとポーラの若いカップル。「ネロはいいわねえ…綺麗で貴賓があって優しいお母様が居て」「ポーラ、何いってんだ！…俺のお袋ああ見えても、おっかねえんだぞ！」「こないだも、ひっぱだかれて…今でも奥歯が痛むぜ！」と右の頬を擦って見せる。「それは…ネロが悪いんでしょう？」

モンスター⑧

テントの入り口に差し掛かるポーラ。「これが今評判の見世物ね！」入り口の天井に吊ってある看板には、『世紀の大発見、恐怖の獣人大公開』とある。「まったく、女は悪趣味だぜ…こんなもの見たかねえや！」「そう…じゃ私一人で入る」つかつかと中に入っていくポーラ。テントの中には沢山の見物人がショーの始まるのを待っていた。その中にネロとポーラを見付ける。「どうせインチキに決まってらあ！」「それはどうかわからないじゃないの！」テント中央に正装をした支配人らしい男が現れた。観客はかたづを飲んで見守る。「皆様…今日は私どものショーに起こし戴き有難う御座います」支配人が手を後方に掲げ幕で覆われた大きな箱を指し示す。「この檻の中に世にも恐ろしい獣人、モンスターが繋がれて入るのです」

モンスター⑨

支配人が紐を引っ張ると幕がバサッと檻から取り外された。巨大な檻の中に見物人の視線が集まった時、檻に繋がれていたのは一人の貧弱な体の男だった。「な、なんだ！…ただの人間じゃないか！」支配人がすかさず言葉で反撃。「この男、ただの男ではございません」支配人の合図で火のついた松明が届けられる。檻の中の男が怯えている。「この男、大変火を怖がります…そしてその恐怖心が男を…」松明を持ったまま檻の中に入っていった支配人。「恐ろしい姿に変えてしまうのです」観客の間から悲鳴が飛ぶ。男の姿は支配人の言うように見る見る化け物へと変貌していった。ショーを見るネロの顔は紅潮し、体は小刻みに振えていた。「ネロ…どうしたの！」「いや、何でもない！」

モンスター⑩

食事をするネロと母親のルーシェ。「ネロ、今日のショーはどうだったの？」「母さんにも見せたかった、どう見ても本物のモンスターだぜ」「普通の人間が火を押し付けられてモンスターに変身するんだ」ルーシェの手からカップが床に落ちバリッと割れた。「母さん、大丈夫かい？」「ええ、ちょっと手が滑ったの」「それが変なんだ！…男がモンスターに変身したとき、俺の気持ちが妙に高まって押さえられなくなったんだ」窓の外を眺める母。「そう、…ネロも今年で１７歳よね」「ああ、そうだよ」

モンスター⑪

人影の無い深夜、巨大テント。テント内の物置の隅に鎖で繋がれていた見世物にされていた男が、椅子に腰掛けている。そこへ、ルーシェが忍び込んできた。「あなたは、もしや、…王妃様では…」ルーシェ、男の焼けただれた頬を擦り話し掛けた。「おまえは！ガロアね！何故こんな姿に」「王妃様…誰にも見られぬうちここから出て下さい」ルーシェは物影に隠れていた人影を察知。

モンスター⑫

「フフフ…王妃！まんまと罠に掛かったな」物影から出てきた支配人。「御前は？…そう、思い出したわスピカーね、レングル将軍の配下の一人…」「いかにも…そしてわが指名は、御前達母子を捜し出し抹殺すること！」支配人とその使用人たちは次々と変身し、モンスターに変貌した。ルーシェが右手薬指にはめた指輪を軽く口付けた時、指輪から微かな光を放つ。ルーシェの目は優しい人間の目から恐ろしい猛獣の目へと変貌していった。多くのモンスターに飛び掛かる寸前のルーシェ。

モンスター⑬

ネロたちの家、ガタガタと物が転がる音に目を覚ましたネロ。「か、母さん！…どうしたの？凄い怪我」右腕と肩に鋭い爪で抉られたような傷を追って壁に凭れ掛かったルーシェ。急いで母の元に駆けつけ肩を貸すネロ。ルーシェ絶え絶えの息遣いで話す。「ネロ…よくお聞き、もうじきここに私達の命を狙う追っ手が来る」「追っ手？どうして俺たちが狙われるんだい！」「わけは後！…はやく逃げるのよ」

モンスター⑭

小さな影がネロの家の隣の大木に登って見ていて飛び立った。馬車を飛ばすネロ。「母さん、医者に行こう！…その怪我じゃ…」「か、母さんの事より今はこの町を離れることが先決！」その時、馬車の馬が何かに恐れ突然止まり出す。道を塞ぐように大小様々なモンスターたち。「な、なんだこいつら！」一体のモンスターの尻尾が馬車を大破させ馬をも貫き殺した。「俺たちを

食う気かよ？」ネロの前に進み出た母は再びモンスターに変身「か、母さん…！」

モンスター⑮

モンスターとなってネロの顔を見る母。「ネロ、これが私と御前の秘密…私達はこの追っ手と同じモンスター種族なのよ」ただ怯えるばかりのネロ。「そ、そんな、そんな…」「私達にはこいつらを殺すしか生き延びる術は無くなった」ルーシェ目掛け次々とモンスターたちが飛び掛かる。爪で、牙でそれらを引き裂くが更に傷の追い討ちで、呼吸も粗く片膝をつく。「あ…母さん」

モンスター⑯

モンスター達を取り纏めるスピカーがネロを睨み。「へへへ…王子は未だ変身能力が無いようだな！」ネロを目指す怪物たち。「は、ネロ…はやくお逃げ！」ネロに気を取られ母にすきが出来た。スピカーの尻尾がルーシェの胸を突き破った。「うっ！」「か、母さん！」「ネ…ロ…」その時、ネロの怒りは右手のブレスレットに宿ったかのように光り出す。そして、ネロは変身した。並み居る雑魚どもはネロの剣のように鋭い爪の餌食と成った。残るは、スピカーただ一人。振り下ろされた尻尾を掴み引き千切る。スピカーもネロの肩口に噛み付き応戦するが気にすること無く首に爪を抉らせ、首をもぎとったスピカーの首は力尽き地面に落ちた。

モンスター⑰

傷付いた母の元に歩み寄るネロ母を抱き抱え「母さん…しっかりして」「母さんはもう駄目…助からないわ」「でもネロこれだけは話しておかなくては…」「御前はモンスターの世界の王子なの…１７年前御前の父ラノス王は、信頼していたレングルと言う男に謀反を起こされ殺され国を奪われたの。私は生まれたばかりの御前を抱いてこの人間世界に逃げ延びたの」「わたしは…いつくるか知れない追っ手に恐れながら１７年御前の成長だけが心の支えだった…そして出来るなら一生人間として御前を育てたかった」「でも…それははかない夢だったわ」「私達の事はレングルの耳にも入ったはず、これからは御前一人でレングルの刺客と戦わなくてはならない」「御前には…父譲りの強大な能力があるはず…その力で、何時の日かレングルを倒し王国の復興を…」そう言い掛け母は静かに目を閉じた。

モンスター⑱

旅支度、で町を離れるネロ。一方ガラーンとしたネロの家でポーラが机に置いてあるポーラあての一通の手紙とその上にネロの母親の指輪が置いてあった。ザッと目を通すポーラ。「ネロ…どこに行っちゃっうの…ネロ」右手に手紙を握り緊めていた外に駆け出すポーラ。「ネロー！」「さよなら、愛しのポーラ！」

ＥＮＤ